

公開講座・テーマ

## 前方後円墳の設計・企画論から 百舌鳥古墳群の巨大古墳を考える

宮川 渉 (みやかわ すすむ)

1932年12月23日堺市に生まれる

1951年 泉陽高校卒業 第3期生(新制高校男子第一期生)

1957年 大阪歯科大学卒業

1962年 堺市南田出井町に歯科診療所を開設現在に至る

### プロフィール

1943年、小学5年生(当時は国民学校)頃から古墳に興味をもち、空襲警報下でも独りで飛鳥巡りをして横穴石室の古墳を見て歩く。

敗戦直後、百舌鳥・七観古墳が高射砲陣地で破壊されて古墳遺物が露出しているのを発見、1947年の京都大学考古学教室の七観古墳調査を裏方でサポートするとともに、百舌鳥古墳群の敗戦後最初の学術調査となる契機をつくった。

1947年から樫原考古学研究所を創設された末永雅雄先生に師事して、考古学の指導と薫陶を受ける。

1955年住宅開発で破壊に直面したイタスケ古墳の保存運動に、森浩一、甘粕健氏らと協力して参加、文化財保存の大切さを学び、文化財保存運動の全国組織・文化財保存全国協議会の設立とその後の運動に参加してきた。

1970年代からは天皇陵をはじめとする「陵墓古墳」の保存が不十分で、周辺の開発に充分対応できていない一方、その閉鎖的な非公開性が考古学・歴史学研究の進展に大きな障害になっている状況を改善していくために、考古学・歴史学関係の学会連合で宮内庁吉陵部との交渉、陵墓の限定公開、懇談を1979年から継続し、陵墓の保存と公開を求める運動に参加してきた。

自己の研究テーマとしては、前方後円墳の設計・企画と尺度論を追究、前方後円墳の地割り実験の啓蒙学習もおこなってきた。

現在・文化財保存全国協議会 常任委員

奈良県立樫原考古学研究所 共同研究員

### 主な著作・

「築造企画からみた前方後円墳の群集的構成の検討—巨大古墳の出現とその背景—」

(『樫原考古学研究所論集 第六』1984年)

『天皇陵』と考古学(共著)(『岩波講座 日本考古学七 現代と考古学』1986年)

「戦後復興とイタスケ古墳」(『文化財保存70年の歴史』2017年)